

通信小海

復活

牧師 水草修治

今年は四月十五日が、キリストの復活日（イースター）である。「春分のあとの最初の満月の次の日曜日」が復活日と決まっている。この日、世界中の国々で復活節の礼拝がささげられお祝いがされる。

「復活」ということばは、スポーツ大会で「敗者復活戦」などと比喩的に用いられるのだが、本来のキリストの復活がどういう出来事であったのか、どういう意味があるのかということは、案外知られていないかもしれない。

人は死を恐れる

今月のみことば

「しかし、今や、キリストは、眠った者の初穂として、死者の中からよみがえられました。」第一エペソ十五

「死ぬことは、自然なことだから、何も恐れることはない。」としきりに強調する人がいる。が、考えてみれば、そう強弁しなければならぬほど、やはり死は不自然なものであるう。

太陽が東の山から昇って、西の山に沈んだとて「恐れることはない」と強調する必要があるように、自然なことについてはだれも「自然なことだ。」と強調する必要がない。けれども、もし太陽が西の山から昇ってきたら、「恐れないでください！自然現象です。」といわねばなるまい。不自然だからである。「死は自然なことです。死など恐れる必要はありません！」と強調すればするほど、その人は、死は不自然であり、恐ろしいことだと暗に述べているのである。

それにしても不思議である。人は死ぬ存在なのに、死を超えて生きたいという願い、言い換えると復活への望みを心の深い所に抱

日本同盟基督教団 松原湖高原教会 牧師水草修治

牧師館 長野県南佐久郡小海町大字豊里二十六―一

〒三八四―一〇三 TEL 〇二六七九二四七七六

郵便振替 〇〇五三〇―〇一六六八三

黄色い十字架

パロの五十メートル北、

ヤナシヨウの向かい

集会あんない

日曜日

朝礼拝

午前十時から十一時

夕礼拝

午後八時から九時

水曜日

聖書を読む会

ご希望に応じて

祈り会

午後七時半

*初めての方も歓迎します。
*個人的相談にも乗ります。

いている。

聖書は、その理由について、本来、人は、永遠に生きる可能性があるものとして造られていたからであるという。ところが、人は神に背き罪を犯してしまった。「罪から来る報酬は死」であり、「人には一度死ぬことと、死後に裁きを受けることが定まってい」るから、以来、人は死に対して恐怖を抱くようになった。

ところが、紀元三十年四月の主イエス・キリストの出来事以来、人は再び永遠のいのちの望みを持つことが許されることになった。

復活の朝

イエスが十字架にかけられたのは金曜日午前九時から午後三時までだった。最期にイエスは「すべて完了した。」「父よ、わが霊を御手にゆだねます。」「と叫んで息を引き取られた。その後、死を確かめるために兵士がイエスのわき腹から心臓へ向けて槍を一突きした。

イエスのなきがらは、アリマタヤのヨセフという人物に引き取られ、岩壁を掘りぬいた横穴式墓所に収められた。

そして、土曜日がすぎ、三日目の朝、イエスに付き従っていた者たちが墓に出かけてみると、そこに主イエスのなきがらはなくなっていた。このとき、天使が現れて言う。「あなたがたは、なぜ生きている方を死人の中で捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。」

その後、復活した主イエスは、弟子たちが集まっている所に現れた。弟子たちは驚き恐れ、霊を見ているのだと思った。すると、主イエスは「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわってよく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」「とおっしゃった。なおも弟子たちが不思議がっているのを、主イエスは焼き魚までも食べて見せられたのである。

聖書に記録されている主イエスの復活というのは、弟子たちの思い出の中にイエス様の思い出がよみがえったというようなロマンチックな話ではなく、またイエスの幽霊が現れたという怪奇小説めいたことでもなく、歴史の現実なのである。

復活の効用

主イエスが復活されたことは、人類が神の御前に犯した罪のつぐないが完了したことの証拠である。もし私が犯罪を犯して刑務所で服役したとしても、刑期が済めば出所してくることができる。同様に罪の報酬は死であるが、主イエスは死という償いを完了したので、よみがえられたのである。あなたも今、主イエスを信じるならば、神の御前におけるいっさいの罪の償いは、今、完済されたとなされる。主イエスを信じるならば、肉体の死後のさばきも恐れる必要がない。そのとき、「あなたの罪の罰は、もう完了している。」と宣言されるからである。

では、イエスを信じている者もなぜ死ななければならぬのだろうか。罪の報酬としての死が支払済みであるなら、どうしてイエスを信じる者も肉体の死を味わわねばならないのか。キリストを信じる者にとっての肉体の死は、もはや罪にたいする呪いではない。死は、至福の国、永遠のいのちへの門である。

地域通貨の話

実に興味深い講演を聴き、ビデオを見る機会に恵まれた。講師は日本とアジアの農村医療に挺身して東奔西走されている医師である。内容は、なんと経済の話、特に「地域貨幣」にかんしてである。

印象的だったのが、シルビオ・ゲゼルという二十世紀初頭を生きた経済学者のことばだった。その趣旨は、地球上のあらゆる被造物は有限であり、やがては朽ちて滅びていく。それなのに、利子が利子を生む近代の貨幣はあたかも無限な神のようである。人類はこの貨幣によって、災難をこうむるであろう。貨幣もまた他の被造物と同じように、朽ちていくものと同じことが必要である、ということである。

近代経済のカネの神格化が、人類を恐ろしい災疫に陥れる。その災難とは社会の不平等そして戦争・経済恐慌である。

ゲゼルは十七世紀に始まる近代貨幣の利子システムに、問題の原因を見出した。貨幣はもともと物々交換では不便なので、物やサービス^①の代用物として始まった。ところが、貸した金に利子が付くというシステムが始まると、カネには新しく資産としての機能が加わる。つまり利子が利子を生むので、人はこれを貯蓄して資産とするようになった。また、逆に借金をすると、利子が利子を生んで借りた人の首をしめていく。こうして、持てる人はいよいよ持つ人に、持たない人は持っているものまで取り上げられ、貧富の差が社会を分断する。現代ではさらに貨幣は投機の対象となっている。

近年のように不景気で先行き不安となると、人はカネを蓄えて買い控える。すると、いよいよ不景気になり、いよいよ先行き不安となる。するとさらに買い控え、いよいよ不景気になる。結末は戦争か大恐慌。

そこでゲゼルは、ある町内で通用する「老化する地域通貨」を工夫した。毎月一定比率で価値が減る通貨である。たとえば今月千円なら、来月になれば九百円、再来月になれば八百円・・・というふうに。そうすると、

人は当然、全国通用の貨幣よりこの地域通貨を優先して使うようになった。結果、落ち込んでいた地場産業は急速に元氣を取り戻し、地域外の大資本のやりたい放題にも対抗できた。今日、こうした地域通貨の試みはスイス、ドイツ、米国のいくつかの町、そして日本でも三十箇所が始まっているそうである。私は、この話を聞きながら主イエスのことばを思い出していた。

「だれも、二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

貨幣は偽りの神と見なされる性質をもっている。貨幣は神のごとく物の価値を定め、さらに利子がつけば無限に拡大し、それが私たちに繁栄を夢見させその心を縛り、貧富によって社会を引き裂き、戦争や恐慌といった災難に巻き込む。しかし、まことの神を主として自分をそのしもべとするならば、私たちは富の主人となり、これを道具として活用し正しく支配することができるであろう。

わが恵み

汝に足れり

療養中の老夫妻からの手紙に「わが恵み汝にたれり」ということばを見た。このことばは、宣教師パウロが神からいただいたことばである。パウロは、激しい肉体の苦痛の中にあつた。そして、彼は三度、その病が取り去られるように祈った。けれども、その祈りは聞き届けられなかった。その代わりに与えられたのが、このことば「わが恵み汝に足れり」であつた。現代語訳では、「わたしの恵みはあなたに十分である。」とあり、その後に「というのは、わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである。」と続く。

人はだれしも強くありたいと願う。力が欲しいと思う。肉体が強壮であれば、有名スポーツ選手になれるかもしれない。財力があれば、豪邸でも高級車でも思いのまま手に入るかもしれない。権力があれば、人

をあごで使うことができるかもしれない。知力が優れていれば、一流大学に行つて、高級官僚にもなれるかもしれない。人は、強くなりたい、力が欲しいと願う。なぜか？親だつて世間だつて、何かとりえがないと認めてくれないのが世の中だからである。

けれども、強さのために、しばしば見えなくなってしまうものもある。自信があると見えなないことがある。それは神の恵み。私は

生かされているのだという謙虚な喜びと感謝の気持ちである。

この御言葉を記した手紙をくださったクリスチャンのご夫妻はそろつて相木の出身で、しばしば信濃毎日の投稿欄に文章を掲載されている健筆である。今回ここに紹介させて頂いた。日常生活のなかにしみじみと神の恵みをかみしめるような文章に胸打たれる。